少女権利

Circlecafe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女権利

【Ｎコード】
Ｎ５３３０Ｏ

【作者名】
Ｃｉｒｃｌｅｃａｆｅ

【あらすじ】
冷たい部屋で血まみれで裸
飲んだ体に染み渡る水
自分の権利ってなんなんだろう…

▼シリーズ続編あります
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｓ０８９６ａ／

序話

『見紛うなかれ　貴女は一人』

これは痛い…
死ぬんだろうな

ああ　気持ち悪い
ヌルヌルしてる

「あ…」
急に視界がクリアになる。
長い黒髪が地面に血で、張り付いている。

ペリ…
細く白い手を　冷たい石床から剥がす。
一呼吸置いて　手のひらを眼前で広げる。

「……！！」
気持ちの悪い血色が、どす黒く乾いて罅割れて目に映る。

「うえ…！！うぇええ！　げほっ　げほっ」

仰向けのまま、噴出してしまう吐排物

「はぁ　はぁ　うぁ　あああああああああああああああああああああ

ああ」
一瞬でわかるこの異常な状況に気が狂いそうだ。

しばらくして、自分の名前を思い出した。
思い出したというのもおかしな話だけど
出口の無いこの部屋の真ん中でしゃがみこんで、ふと思い出したんだ。

「ロナ…」

口に出してみると同時に涙があふれる。

「ひぐ…」
なんで私はこんな所にいるんだろうと。
服も着ず、何でこんな事になったのなんてわかることも無く。

壁に近づくのには抵抗がある。
異常な状況。
自分の身を守る為のように、彼女は小さく丸まっている。

寒い。
身じろぎをすると、肌に張り付いた髪が凝固した血液を割る音がする。
「い…」
ピリピリとした感触が走るのが不快だ。

眠ってしまっていたのか。

意識が途切れていたのか。
衰弱しきった自分の体が床に倒れている。
「あ…誰」
誰か来たのか。
血まみれだった体は綺麗になっていて、やわらかい毛布でくるまれている。

「あ…　あ…」
水ってこんなに美味しいのか。
目に映ったのは水。
器に顔をつけるように飲んでいく。
「かふ…」
喉が開かなくて飲み込めず、口の端からドボドボと零れてしまう。

「はう…あ…」
ゆっくり染み込ますように口に含む。
しばらくして　また口に含む。
少しずつ　少しずつ明瞭になっていく意識。

「……」
気がついた。あの上のほう、小さな窓がある。
誰か見てる。

黄色い瞳。
まだ未発達の体躯で立ち上がる彼女。
水が全身に染み渡り、体を楽にする。
空になった鉄の器…ちょうどあの窓の大きさより少し小さい。

ガシュン！

見事確実に彼女の手から投げられた器は窓を割る。
細かな硝子片が少しだけ床に跳ねる。
キラキラと綺麗。

第一話

馬乗りで覗き込むように見るのはロナ。
その長い黒髪が下になった相手の顔にかかる。

「う…新入り…」
鼻血をだしながら金髪の少女が言いかける。

「？」
ロナは首を傾げ、そのまま拳を高く上げる。

「ちょ…や…やめなさ…　あぎ！」

カラカラと転がる歯。
殴られている少女の、少し気の強そうな顔が紫に鬱血する。

ほんの少し前。
自分のいる何も無い部屋の壁が開いて入ってきた、自分より少し年上そうなこの少女。
さっきも言われた『新入り』とか話しかけてきた気がする。
毛布に手をかけられたから怒った。
そしたら腹を蹴り上げられた。

「あ…　あんた…　つよ…」

バチン！！

容赦なくまた殴る。

「別に…　わたしは　あんたの毛布盗る…　つもりなんて…」

「そうなの？」

きょとんと無垢な表情。

「でも　しんようできないよ」

「やぁ！やめなさ…」

ビチッ！！

返り血が頬にあたる。

「あったかい…」

鼻が折れたのか、止まらない出血の溜まる顔面に手を浸すロナ。

「ぐふ…　ふ　…服をあげるわ…　だから　だから　ゆるじて…」

血と涙でぐしゃぐしゃになりながら懇願する。

「服？服！！！うん！うん！いいよ！！」

ロナから開放された少女は苦しみながら手招きをする。

部屋の外に。

「うわぁあ」

嬉しそうに身にまとう服。

金髪の少女と同じような、フリルのついたゴテゴテの衣装のようなかんじのもの。

「ありがと！」

嬉しそうにはしゃぐロナ。
連れて行かれた部屋はなかなかのもの。
アンティークな家具で統一された、中世の時代のような部屋。

「少し…大人しく…してて…　シャワーを浴びたいわ」
まだ血の止まらない鼻を押さえて苦しそうに言う。

「ねえ　きみ名前は？」

「はぁ…？」
さっきまであんなに自分を殴ってきた相手がそんな事を聞いてくるなんて。
「ぼくはロナ　君は？」

「……アリドラ」
そう言うとシャワーのあるほうの戸を開ける。

「アリドラね」
一人になった部屋で大の字に寝転びながらロナはそう呟いた。
肩までの金色で柔らかそうな巻き毛、透き通るような青い目のアリドラ、ロナは服をもらった事が嬉しく思わず微笑んで。

第二話

「アリドラー　アリドラー」
ロナが呼ぶ。
今日何度目か。
「うっとおしいわね、なんなの」

「別になまえをよんだだけ」
そんな事を繰り返しているだけの今日。
折れた鼻がズキズキ痛む。
目の前のこの無邪気な少女が自分に馬乗りでこの傷をつけたとは思えない。

「あんた…何？」
聞く。この質問も何度目だろう…
「へ？ぼくはロナだよ」

かわらない返答…
「いい？私は”与える”アリドラなの。この施設の子供達は役目がある。あなたの役目は？」
「だからなんなのそれ」
埒が明かない。
「普通ね、いきなり起きたらこんなところにいたら疑問に思うでしょう？　施設とか　役目とか言われたら気にならないの？？」
「ぜんぜん」
そうしてロナはクッキーをほおばる。
屑をボロボロとこぼして食べるのがアリドラの神経に障る。

「あの窓かな？」

ふいにロナが口をひらく。
「窓…？」

「うん　窓。ぼくを誰かが見てた　凄い小さい窓！！」
身振りでその大きさを再現する。
「窓…　どうしたのそれで？」
アリドラは真剣だ。
「割った…　あ…クッキーちょうだい」
空になったイレモノを渡す。

クッキーの新しい缶をもってきて小さな声で呟く…
「……役目じゃなきゃ本当に嫌よ…」

「ふ…？なんか言った？」
ロナはすぐに蓋を開けてがっつく様に食べる。

コンコン…

戸がノックされる音。
アリドラは急ぎ開けて落胆する。

「こんにちはアリドラ、通達だと思った？」
ニヤリと笑う来訪者。
「レイラ…」
アリドラによく似た少女。白い服と二つに結んだ髪が無ければ見分けがつかないかもしれない。

「あれ、もらえる？」

レイラと呼ばれた少女がロナを指差す。
「あんたもクッキー欲しいの？」

「なめてるの？アリドラ…姉の言う事は一回で理解しなさい」
目つきが変わる。
背筋の凍るような、青い目。

「でもあの子は役目すら…」
そういうアリドラを押しのけてヅカヅカと中に入り、ロナの前に立つ。

無視したままクッキーに夢中なロナ。
「アリドラ、あんたに私はこの子を与えてもらう、それでいいわね？」
レイラが取り出したもの。

ガン！ガン！！ガン！！！

拳銃で当たり前のようにロナの腹を三度撃つ。
「あ…　いた…　ああ！！」

急な事にロナは血まみれの腹を押さえのた打ち回る。

「はじめまして”略奪”のレイラよ」

「え…　あ　アリドラ…」
ロナには見分けがつかないのか、レイラをアリドラと呼ぶ。
「馬鹿な子ね」

ガン！！

「ひゃう！！」
太腿に撃ち込まれた銃弾。
「アリドラ、いいわね？貰うわよ？　この子を与えて頂戴」
「……嫌よ」
拒否。
怯えながらの必死の拒否。
「あら、いいの？あなたは”与える”のが役目」
「そんな通達はうけてはいないわ…」
目を合わせれない。
「あはは！！そうね　そうね　そうね」
レイラが笑いながらアリドラに近づく。
「姉の優しさよ、ほら」
ポケットから取り出した紙。
上等な紙に書かれたその内容はただ一行
『アリドラの元の一番新しいものを略奪せよ』
「通達…」
アリドラも理解している。この施設においてはこの通達が全て…逆らえばどうなるか。
「そう、わたしもあなたから略奪なんてしたくないのよ、かわいい妹だもの」
スカートを握る手に力が入る。重圧感…
「だけどね、私は執行者。逆らわないでね？」

「レイラ…」
「何？」
再度ロナに近づいた姉を呼び止める。
「危ない…」

「何が…　つ！！」
寸でで飛び掛ってきたロナを避けるレイラ。
「この餓鬼…なんて回復の早さなの…」
「はぁ　はぁ　アリドラのにせもの！！！」
立ち上がるロナ。
歩みを進めると血液が床との間でニチャニチャと鳴く。

ガン！！ガン！！！！！ガン！！！！！！！！

銃声、また地に伏すロナ。
「いたい…　いたいよ馬鹿ぁ！！」

ドゴ！！！

「がふ！！」
レイラの体が高そうな食器の並べられた棚に叩きつけられる。
降り注ぐ硝子片…
「な…なんなの！！」

ゴキュ！！

顔面を鷲づかみにされ更に奥にめり込ませる。
棚の折れた木が首筋を切る。

「はぐ！！あ…」

赤子のように四つで歩き逃げようと。
「アリドラのにせもの…」

「ロナ…やめて…」
アリドラが口を開く。
「ん？　うん」
素直に追撃をやめる。

「はぁ　はぁ　はぁ」
レイラはようやく扉に到達し、そのまま倒れるように外に体を出す。

「……」
無言でその戸を閉めるアリドラ。

「ねぇ　アリドラ、クッキーほしい」
ロナは血だらけになったベッドに座るとそう言った。

第三話

アリドラは考えていた。
目の前には『不可解な存在の少女』
今は寝息を立てているこの痩せこけた者。
久しく届いていなかった通達。
ロナにあの部屋で会う直前、自分の手元に届いた内容を再度見る。

『同階の何もなき者に与えよ』
それに書かれているのはロナのいたあの部屋の位置。
自分の部屋のある階に、あんな所があるなんて知らなかった。
今見れば『階』という表現に違和感をかんじる。
他にもあるのかと、ここだけでは無いのか…
無駄だと思ってしまうような思慮が駆け巡る。

部屋の扉に目を向ける。
あの外は、姉の部屋だけのはずだった。

「アリドラ…」
背後からのロナの声にビクリと驚いてしまう。
早い目覚めだ、15分も寝ていない気がする。
「なによ…」

「ん…」
軽く伸びをしたロナは軽快にベッドから降りて扉に向かう。

「ちょっ…ちょっとまちなさいよ！」
焦りその腕を掴む。
「な…なにしてんの？」

「え？外いくんだよ」
細い腕は微動すらしない。
この体の力はどこから来るのか。
異常な傷の回復力…
自分の鼻の傷はようやく”治りかけてきたばかり”だというのに。

「勝手に外に出てはだめなのよ…」
通達が無ければ部屋の外に出てはいけない。
そんな自分達に課せられたルール。

「それはアリドラだけでしょ？」
見透かすような目で見られている気がする。

「…っ…あなたはなんなの！？」

「ぼくはロナだよ。それに”なんなのかわからないのはここ”だとおもうけど」
何かが自分の中で崩壊する。
ロナの単純な話。
それはそうだ。
ロナの言う『ここ』は今の自分達が置かれているこの建物の事。
大きさも、なんのためのものかもわからない。
そして、アリドラ自信も『ここ』が何かなんてわかる事もない。

でも、そうするしかない状況なのは誰だってわかるはず…

思い出される今までの事。
『勝手に外に出てはだめ』と自分の口で言わしめるまでの経緯。

呼吸が激しくなる
息苦しい

「アリドラ？」

「はっ…はっ…はっ」
息を吸えないのか吐けないのか。
苦しそうにうずくまったアリドラを、ロナは不思議そうに見つめる。

苦しい
空気が入ってこない…

「じゃあいくね」
部屋を出るロナを止められない。
胸の中が痙攣して声すら出ない。

アリドラは少しぬるくした紅茶にミルクを混ぜる。
深い赤茶色に混ざる白。

扉のほうを見つめているだけ。
テーブルの上には、カップがいくつも並び
その中身は一口も飲まれていないミルクティー。

どれくらいの時間がたったのだろう。
あの子がいなければ騒動も無い。
ずっとそうだった。
一人で、たまに来る誰かしらに、欲しがるものを与えたてきただけ。
今回はちょっと変わったお客だっただけ。

姉とここに連れてこられた日。
あの子みたいに、みすぼらしい日々からの離脱だった。
特に私は全てを与えられた。
柔らかい布団、食事。
姉には何もなかったけど、私が分けてあげればよかった。

ある日から姉との交流も無くなった。

私にはこの豪勢な部屋があるし、姉の部屋は何も無かった。
そうだったはず。
だけど姉は来なくなった。

部屋から出ちゃいけないルールは誰が決めたんだっけ。

きっとあの扉はまた開く。
絶対そんな気がする。
姉が私を頼ってくるんだ。
私には与えてもらいに来る。
お客だってそんなに来るわけじゃない。
私に、必要なものを持ってくる顔を見せないあの人がたまに来るだけ。

「おねぇちゃん…」
ちょっと呟く。

第四話

「なにしてんの？」
仰向けで、血反吐を吐くレイラを覗き込むロナ。

「奪い損ねた」
悔しそうにしているレイラ。
「あれのこと？」
ロナが指差す方向には、鉄の仮面をかぶった女性が歩いていく後ろ姿。

「しばらく飯が食えないなこれは…」
レイラが苦しそうに体をおこす。
白い衣服はぐっしょりと赤く濡れて。

「またぼくを攻撃する？」
ロナの顔が近づく。

「しねぇよ。ほら」
紙切れをロナに渡す。
「よめない」

「ちっ…馬鹿なんだな”奪えぬ略奪は略奪でなし”って書いてあるんだ」
「それがなに？」

「はぁ…とにかく…げほっ」
喋りかけて吐血する。
「おまえぐらい頑丈ならよかったけど……あ…」

意識が朦朧としだしているのか、また床に倒れこむレイラ。
「あ…死ぬ…」
「しょうがないよ」
ロナがレイラの頭を撫でる。
「きみはアリドラのにせものだもの」
レイラはそのまま死んだ。
静かに。
その手にはもう一枚の紙。
「ロナ…？」
唯一何故か読める自分の名前をそこに見つけるロナ。

「アリドラ！！」
勢いよく扉が開く。
驚いたアリドラが紅茶を零す。
「な…なに…」
血に濡れた手で目の前に突きつけられた紙。
「通達…？」
「よんで！よめない！！」
「…望むものを持ち…この階から出なさい」
「どういうこと！？」
ロナが少し荒立っている。

「あ…あんたのほしいものをもって…この階…から出ろって事よ」
「え？」
いまいち理解していないロナ。
それも仕方ない。外を歩いてわかったんだろう。ここには、アリドラの部屋、レイラの部屋そしてロナがいたあの部屋以外何も無い。
それをつなぐ廊下だけだ。

「アリドラ」
名前を呼ぶ。
「アリドラがほしい」
ロナの突然の発言にアリドラが困惑する。
「アリドラはクッキーをくれたし服もアリドラのだからアリドラがほしい」

少しの間。

「…何？」
パチパチとなる音
「暑い……」

「あ」
ロナが指差した方向。
ベッドの奥の壁から煙が立ち上がって…
見ている間にシーツに火が移りはじめる。
「え…うそ…何これ…」
呆然とするアリドラ。
「アリドラ！」
ロナが手を掴む。

そのまま部屋の扉を開ける。

「うわっ！」
熱気がいきなり浸入する。
「なに…何？…何…」
廊下は中央を残し端から火の手をあげている。
「こっち！」
左手はもう火に包まれて進めない。
ロナはアリドラをひきずるように右側へと駆け出す。

火にはさまれた道を走る。
「なんなの…」
アリドラの目に映ったもの。
廊下の端で、倒れこみ燃えている誰か。
「うそ…」
あの体。
焼け爛れてわからない。
でも、あの自分とまったく違わぬ体格。
間違いなく。
「おねえちゃん…」
アリドラが立ち止まる。
「だめだよ！！」
そのままロナにひきづられていく。
炎はさらにせまり狭くなる廊下。
アリドラのスカートの端に火の粉が飛び燃え始める。
「おねえちゃん…おねえちゃん…」
ロナの力にはかなわない。
ズルズルとそのまま運ばれていく。
「アリドラ！どっち！！」
火を抜けた少しスペースのある場所。
アリドラの目に映る、火に飲み込まれていく廊下。

強いオレンジの発色が、姉の姿を隠す。
「アリドラ！！どっち！！！」
ロナが大声を出す。

「あ…え…」
目の前には無いはずの階段。
無かったはず。
いつの間に。
私がロナを迎えにいったときはこんなの無かった…
「アリドラ！！！！！」
ロナがアリドラのスカートを引きちぎるように脱がす。
「は…」
スカートは裾だけでなく中腹くらいまで火を湛えている。

「アリドラ！！どっちいけばいいの！！」
ロナの声すらも飲み込むような燃える音。
轟々と響きながらこちらに迫る。
天井すらも燃え。
「し…下」
渇く喉、ひりつく肌。
なんとか出たか細い声。

「うん！！」
ロナはアリドラを抱えると下へ向かう階段に飛び込んだ。

「げほっ…げほっ…」
煤にまみれた肺の中身を吐き出すようにむせる。
階段の上が明るい。
火は上に燃え上がる事は常識。
懸命な判断だと思う。

ふと、そんな冷静さが自分の意識を戻す。
同時に襲われるのは、今の状況への理解。
「おねえちゃ…」
アリドラは泣き崩れた。

第五話

「やっぱり”ここだけ”じゃなかったのね」
『喪失している暇など与えない』そうかんじさせるよう、階段を降りた二人を迎える少女が言う。
火の手から逃げ、疲れ座り込むアリドラとロナの前に立ち見下ろすように。
「きみは？」
ロナが聞く。
褐色に赤い目、肩を越える辺りの白の髪。背丈はアリドラより少し高いくらいか。
活発そうな彼女はロナの手をとり立ち上がらせる。
「教えてくれない？どうやってここに来たか」

彼女の部屋は簡素なものだ。
ロナは味気の無いパンを貰い、まるで警戒した様子も無く床に座り込む。
隅でアリドラは膝を抱えうずくまったまま。

「あっちの金髪は使い物にならないね」
「アリドラは優しいよ」

褐色の少女もロナの子供じみた説明には少々困惑している。
「なまえは？」
パンを食べ終えたロナが聞く。

「ん？あたしの名前か？エルラ」
名乗る。
「えるら？変な名前だね」

ロナが屈託のない笑顔で笑う。
エルラと名乗った少女の不快な気持ちはアリドラに向けられる。
「いつまでウダウダしてんだ！」
髪を掴みあげ顔を見せさせる。
涙と鼻水で汚れたアリドラの顔。
「もしかしたら私たちが置かれてる”ここ”の謎がとけるかもしれないんだぞ！あの階段はなんだ！おまえらはどうやって…　う」
激しく罵る様に言い始めたエルラの声が止まる。

「アリドラをいじめないで」
ロナがその小さな手で、エルラの白い髪を鷲づかみにして頭を後ろに引いている。
「てめぇ！」
エルラがアリドラを掴む手を離しロナを突き飛ばす。
ロナの手にちぎれて残る白い髪。
「なんだよ！」
立ち上がりにらみつける。
「生意気な餓鬼だ…な！」

ベキン！！

嫌な音がしてロナが倒れこむ。
「あぅ…」

「少しお前は黙ってろ」
エルラの硬そうなブーツのつま先がロナのこめかみを捉える。

「あ…」
暗転する視界。
ぐるぐるとまわる吐き気を催す痛み。

「おい金髪！何か言わないとおまえの連れは殺す」

ガツ！！
もう一度同じ場所を蹴る。
「答えろ！なんであの階段は出てきたんだ！」

ガッ！
一言で人蹴り。

「…わからないわ。気がついたら……」

「本当か？…他に何か今までと違うことは無かったか？」

ゴス！！
反応の無くなったロナの体が裏返る。

ゴン！！
分厚いゴムの靴底がロナの顔面に置かれる。
少しづづ力をこめ、小さく嫌な音がそこから聞こえてくる。

「…火…火が突然…部屋に…」

「いいか？私はある程度までは知っている」
アリドラの前に投げられた紙きれ”通達”

『姉殺しを裁け　道は繋がる』

「姉殺しはどうみてもお前じゃないな？この餓鬼が殺した。そうなんだろ？」

「……！！」
アリドラが絶句する。
自分の一番考えたくない事。
そして、自分すら気がつかなかった…ロナが殺したと…それ以外はあり得ない。
考えていなかった…考えたくなかった。
でもロナのあの血まみれの手。
そしてあの燃えていた自分と同じ体格の死骸。

「そうね…それを認めたら…ロナが殺したことを認めたら　あの爛れた醜い死骸が姉になる」
アリドラの涙が止まる。
あれは間違いなく姉。
ロナが殺した姉。
私の姉。

「どきなさい」
アリドラがエルラをどける。
「ロナ…ごめん許せない…あんな姉だけど…」
アリドラが蹴る。
「いたいよ…なんで　アリドラ…」

ロナの声。
蹴り込んだはずの足は掴まれ止められている。
血濡れの顔のロナが仰向けのまま、こっちを見ている。
「はやくやれ！！おまえの姉を殺した餓鬼だろうが！！」
ゴキン！！！
「あっううう！！」
ロナのアリドラを掴んだ手がへし折られる。
「甘えたお嬢様はどいてろ…」
エルラは椅子に手をかけ持ち上げる。
「早く死ね！」
ガガシャアアア！
強く叩きつけられた椅子はバラバラになる…
「あ？」
そこにロナはいない。
「なんだよ…」
声が聞こえる。
「…！？」
自分の足元、小さくしゃがんだロナ。
ゴン！！！
「くぅ！！」
ロナがそのまま足を伸ばし、折れた左手をエルラに叩きつける。

「ぼくは殺してないのに…」

メキ…

ロナの折れた左手。右手で軽く戻すようにいじる。

「ぼくは殺してないのに…どうして怒られるの…」

「うるせぇ！！！」

エルラが殴りかかる。

パン…

それを受け止めるのは”既に回復した”ロナの左手。

ゴキュキュキュ！！

「あっぎゃぁあああああああああああ」

拳をつかんだままロナが手首を捻りあげる。

「僕は殺してないのに！！殺してないのに！！」

「ぐあああああや　…やめ…　」

ベキュ

肘から飛び出した骨。

「ロナ…本当なのね……」

アリドラが囁く。

「うん！」

エルラをおもちゃのように放り出し、笑顔で答える。
信じてもらえる嬉しさを満面の笑みで表現して。

「あふ…あっふ…」
激痛にエルラは泡を噴き気絶している。

第六話

「ちくしょう…ちくしょう…いってぇ…」
エルラが腕を押さえている。
アリドラによって、折れた骨の固定の為に巻かれたシーツに血が滴る。
「あなたもなかなかの回復のはやさね」
ロナが寝静まり、部屋の外に出て話す二人。
「うるせぇ…　あれは化け物か」
「私たちはみんなきっと化け物よ」
たった数刻でエルラの腕の痛みは会話できるくらいになっている、自分の折れた鼻ももう綺麗だ。

アリドラが降りてきた階段を見てきた。
上の階はまだ火が燃え、とても上がれそうにない。

「ロナが殺したのは間違いない、姉に銃で撃たれてるから」
アリドラが俯いて話す。
「ひでぇ姉だな。殺されても…」
エルラが失言に気がつき黙る。
「ロナは…何か分からない…私のいう事は聞くけど…あの子が何か…」
アリドラも混乱の色が隠せない。
「そりゃ…どういうことだよ…　いてっ…」
動くたびにぐちゃぐちゃの腕が痛む。
「あなたの呼び名は？」
アリドラが壁に背をつき座り込みながら聞く。
「私か？血縁…血縁のエルラだ」
血縁と聞いて少しアリドラの顔が歪む。

「そう…私たちは必ず一番最初に”そういった呼び名”を与えられる…でもあの子はそれが無い…少なくとも…知らないわ」

「なんだそれ？」
二人ともそうなのだろう、アリドラも思ったとおりだ。
一番最初、彼女たちが”ここ”で目覚めたときの通達。
そこに描かれているのは”呼び名”。

「私は与えろ…とあった。だから私の部屋には何でも運び込まれた…」
思い出す姉の姿。
「だから私は書かれたとおりに姉に与えた」

「誰がおまえの部屋に運んで来るんだよ」
エルラの質問。
「え…あなたのところへはこなかった？」
何がだ？といった顔でエルラは見る。
「だって食事が無ければ…何を」
アリドラも不思議そうに見返す。
自分のところには、必ずどこから来るのかわからない誰かが部屋の前に木箱を置いていった。
『許可無く外へ出るな』
そう書かれた通達を守った。
自分が最初姉の部屋に遊びに行ったとき…その通達を守らなかった日、次の日部屋の前にあったのは木箱ではなく酷く怪我をした姉。

「どうした？」
エルラの声で我にかえる。
「食事なら…」
エルラが腕をかばいながら立ち歩き出す。

「これ…」

その廊下の一番奥。
かび臭いちょっとしたスペース。
手の届かないくらい高い位置のダクト。
床に溜まるのは…残飯
「違うのか？　まぁここにつれてこられる前の生活と同じだ」
どこの残飯なのか…
アリドラは思い出す。
自分の生活のゴミはまた木箱にいれドアの外において置けばよかった。
「嘘…」

「今日は落ちてこないな」
エルラが上を見て呟く。

「あなたは…エルラ…血縁…」
「あ？なんで私の呼び名が血縁かって事？」
「そ…そう」
なんでもよかった。間が持たない。
何か話さないと、でも今の自分の気持ちに感づかれてはいけない。
何をされるかわからない。
きっとエルラには勝てない。
せっかくロナを大人しくさせることで、ここまで会話をできる状態になったのに。
「私はここに来る前にスラムにいたからなぁ、よくある妹弟は多いけど親と飯無し
　そこで身売りしたらこんな所だ、ちゃんとあいつら元気かな」
エルラが少し遠い目をする。

「私は貴族の妾の子。姉と連れてこられたのがここだった…　お互い生まれてこなければよかったようなものね」

「おい…つっ…いてっ…」
エルラが動くほうの手でアリドラの首根っこを掴む。
その反動は反対の腕を痛ませる。
「おまえさ…うっとおしいヤツだな」
それだけ言うとエルラはまた来た廊下を戻っていく。
部屋のほうに。

「心配すんな。腕が治るまであんなのと勝負できねぇ」
アリドラはただ後姿を見つめるだけ。

翌日、エルラは今までで一番不可解なものを見せられることになる。
扉の前におかれた食事に着替え。
中に詰められた木箱。
「誰がどこから持ってきた…」
ロナは木箱の中にクッキーを見つけ嬉しそうに食べている。
「わからないわ…ただいつもどおりよ」
アリドラはそう言うしかなかった。それが事実で、自分の認識している全てだ。
「くそ…わけがわからねぇ…ただ”持ってきたやつ”がいるってのはまちがいねぇ」
エルラは奥歯をギリギリと鳴らす。

「通達があるわ…」
アリドラが開く
『血縁に与えてはならぬ』

その一行

「どういう事だよ…」
エルラの通達もそこにあった。その内容。
「みせて！」
ロナがそれをとりあげる。
「よめない！アリドラ！」
アリドラに呼んでもらおうとそれを渡す。

「…！！」
『施しは降らない　一日に一つ血縁を失う』

「かえせ！！」
エルラが奪いそれを破り捨てる。

「血縁を失う……血縁を失う…一日一つ…」
ぶつぶつと呟きながら小さな暖炉の火箸をとる。
赤くなった鉄。
「血縁を失う…一日で…一つ……うわぁあああああああああああああああ
火箸が体に吸い込まれるように刺さる。
「あああ！！あぐあ！」
アリドラの腹から煙が上がる。
「おい餓鬼！動くな！！アリドラを殺すぞ！！」
それしか思いつかなかった。
折れた腕で、ロナに勝てるはずが無い。
寝込みを襲う事すら躊躇してしまう戦力差がある。
あの餓鬼は、アリドラの言う事を聞く…
「あ……あああ」
アリドラの体内で音をたてながら鉄の温度が下がっていく。

「アリドラ…この餓鬼をなんとかしろ……殺されたくなきゃな！！」
ズ…
さらに奥に押し込まれる火箸。
「アリドラ、大丈夫だよ」
ロナが冷静に言葉を放つ。
「あ…あぐううう」
苦痛　苦痛　苦痛。
酷い痛みが首筋まで走る。

「ね、へんな名前の人、なんでそんな意味のない事をするの？」

「…」
一瞬でエルラの視界は消える。
何をされたのか。何かで強く殴られた気がする。
妹や弟の顔がよぎる…
「アリドラ」
ロナがアリドラに近づいて抱きしめる。
「うぐ…いたい…いたいよ…」
腹の火箸は刺さったまま。
「これで大丈夫だよ、ほら」
ロナ宛の通達を見せられる。いつ手に入れたのか…
そこには簡単な絵が描いてある。
一人大きな人、それに小さな人が六人。
大きな人の首は切られていて、六人の小さな子は笑顔で。

第七話

「信じるわ…」
そう思い込みたかった。
ロナの言うとおりの事を信じたかった。
そう推測する材料なんてたくさんある。
あの誰が持ってきたかわからない木箱。
ロナの見たと言う鉄の仮面の女。
それが姉を殺した。ロナは殺していない。
そうだとしても、ロナを私ではどうにもできない。だからそれでいい。

ロナに背負われて降りる、あたらしくできた階段。
一段一段がお腹の傷を痛める。
エルラの階には他に誰もいなかった。
部屋も一つ。
いつからあの子はあそこに一人でいたのだろうか。
「アリドラ…」
階段の中腹あたりでロナは立ち止まる。
「どうしたの…」
アリドラは座らせるように降ろされる。

階段の下。
それぞれ手に何かしらの武器を持った少女が複数人。
「たくさんいる…」
視界にいるのは数えで三人。
「そんなに…」

アリドラが言いかけたとき、ロナが呟く。
「37人」
一人の少女が階段を駆け上がってくる。
その手の大振りなナイフを向けて。

「そいや！！」
ロナは飛び上がるようにして蹴り落とす。
階段を転がり下に落ちる少女。
「ロナ…やばい…」
アリドラの目先、階下にあつまってくる人数はどんどん増え。

「アリドラ…上ににげて！！」
ロナに言われるがまま体をもと来た上の階にむける。
「あぐ…！！！」
お腹の傷、体の中が強く痛む。
「アリドラ！はやく！！」
ロナは次から次に来る少女たちに応戦する。

「あ…うぐ…ぐ」
頭痛がするほどの腹痛。
這いずるように階段を上がる。

「きゃ！！や！！」
ロナの横をすり抜けた一人がアリドラの足を掴む。
「いや…いや…」

「アリドラ！！」
飛び乗るようにしてその少女の首後ろに刃物をロナがつきたてる。
倒した相手から奪ったのだろう。

鮮血の中で引き抜かれた西洋の剣のようなものが鈍く光る。
「い…い…」
絶命しても掴んだ手はなかなか離れない。
「い…いい…いいいい！！」
反対の足でその少女の死骸の頭を押す。

「は…！！あ…あ…」

おなかが痛い。それでも下から追われるように上の階を必死に目指す。

「や…やだ…なんなの　なんなの　なんなの　なんなの」
階段を抜け廊下を走る。
「もう　なに　なに　なに…」

ガ！！！！！

いきおい良く目の前の扉をひらく。
エルラの部屋…
「うあ！」
アリドラの入った部屋。
特に特徴のない簡素なそこ。
仰向けで顔面を抉られたエルラの死体。

「ひ……」
そこで思考が停止する。

「ドアをしめてー！！」
遠くから聞こえるロナの声。
振り向けばまた別の少女が斧のようなものを振りかざしている。

「ひ！！！」

バン！！

強く、戸を両手で閉める。

「あぎ…！！」

お腹に響く。

ド！！！！

力が抜けた瞬間。

斧を叩きつけられた扉がまた開きアリドラを弾き飛ばす。

開いた隙間から血走った目。

「ふぅ！ふぅ！！ふぅ！！」

木戸に突き刺さった斧を必死に抜こうとするその少女。

目線はアリドラにむけたまま体を斜めにして。

ドアがガタガタと激しく揺れる…

「ぐぎゃ！！」

頭に何かが飛んできてその少女をそのまま貫く。

「アリドラ！！」

ロナが部屋に飛び込んでくる。

全身血まみれだ。

ロナを応追ってくる何人かの足音が聞こえる。

倒れた少女を足でどけ扉を閉め鍵をかける。

「ロナ……」
恐怖のせいでアリドラはへたりこんだまま。
「アリドラ、まだたくさん来るよ…」

ゴガゴガゴガゴガ！！！！
扉を何かで叩かれる音。
複数の音が迫り来る。

「あああ…どうしよう　どうしようロナ…」

「ここなら大丈夫だよ」
ロナは手に椅子をとる。

ゴン！！ドガ！！！！
扉の崩壊しそうな音が部屋中に反響する。
アリドラは耳を押さえて、それでもロナからは視線を逸らせない…

「え…　ロナ…だめ…やめてぇえええええええええ」

ガン！！！！

ロナが勢い良く扉を開けた。

雪崩れ込むように人が倒れ入る。
「ここならたくさんいても同じだよ」

バキャン！！ガスッ！！！ドガ！！！！
ドアの入り口で滅茶苦茶に椅子を振り回す。

折れた木の破片が刺さろうとも、人が折り重なろうともロナは椅子で叩き続ける。

ビチャ！

アリドラの頬に血しぶきが跳ねる。
「う…うぃあ…いいい」
アリドラは硬直したまま怯えの象徴が自分の下半身を濡らしていくのを感じていくことしかできない。

「ぐぎゃ！　あぎゅ！！がぁああ」
痛みに反応する声。
ロナは椅子の形を無くした木片を一人に突き刺すと、鉄の棒のようなものを動かなくなった一人から取り上げる。
「あと１０人！よゆうだ！！」

バチン！！！！
また一人倒れる。
「きみたちは逃げないね！」

相手の数が減ればロナの独壇場。
見事に、そして大雑把に屠られる少女たち。

「きみでさいご！！」

雄たけびをあげて飛び掛ってくる口の中に縦にその鉄棒を突っ込む。
水っぽいはじけるような音がして後頭部に突き出るそれ。

「ふぅ…　アリドラ！おわったよ？」

黒い衣装はより濃く染まり、滴る目の覚めるような赤い血液。
びしょぬれのロナがアリドラのほうに振り向く。

「あ　い　い」
声が出ないくらいの恐怖。
「あれ？アリドラおしっもらしてるよ？」
キョトンとしたロナがアリドラの前でしゃがむ。
顔の高さが揃う…
「アリドラ、いくよ？」

「い　い　いいやぁあああああああああああああああああああああ」
ロナが手を差し出したとき、アリドラが絶叫する。

「アリドラ…　なんで　ぼくがんばってまもったのに…」
ロナがしょげて部屋の外に出ていく。

「ぼく…がんばったのに…」
膝を抱えて子猫のようにうずくまる。

第八話

「……もうむり…」
アリドラは部屋で一人怯えていた。

カタン…

「い…」
物音、異常なまでに鳥肌が立つ。
目を開けばたくさんの死体。
扉を閉める為にはあれをどけなければ。

「はぁ……」
重たい。
折り重なる骸。
それをずらしていく。

「う…」
粘性を帯びた音。
「い…！！？」
体を動かす命令を失った首がぐるりと回りこちらを向く。

「たすけて…」
ずりずりと後ろに下がる。
「も…無理…　助けて…ロナ…」

「いいよ」

扉の向こう側の死角から声がする。
「アリドラ…もう　ぼくをいやがらない？」
寂しそうな声。
「うん…うん…うん…」
嫌悪心。
自分は逃げていただけ。
アリドラのなかにうずまく感情。
あんなにも身を呈して自分を守ったロナを拒絶した。
「ごめんね…ごめんね…ごめんね…」
口をついて出る言葉はそれだけ。
枯れたと思えるほど流したはずの涙がまた頬を伝う。

「なんであやまるの？ぼくがおこってたわけじゃないのに」
ロナの姿が見える。
「ロナ…」
ヨロヨロとアリドラは近づいてその細い体を抱きしめる。
ロナの手にも少し力が入る。

「こんなに細いのね…あなたの体…」
「アリドラ…あったかい…」

「下にまだ誰かいるよ　音がする」
しばらく抱き合った後、血を拭われながらロナが言う。
「そう…」
恐怖感は無くならないが、今は幾分かよい。
ロナの言う音なんて聞こえないけれど、この子が言うならきっとそうなのだろうと思う。
「降りなきゃ」

きっとそうなんだ。ロナが言うとおり、下に行かなければ何も進まない。
何に向かっているかなどわからないけれど、このままここにいるわけにもいかない。

「こんばんは」
下の階に部屋は無かった。
廊下…そうというよりも降りた先がそのまま広い部屋。
その部屋に三人の少女に守られてベッドに横になる少女が挨拶をした。
「強いのね今回の子は」
その少女は何やら器具のようなもので繋がれ、無数のパイプが布団で隠された体に伸びている。
守護を務めているであろう少女たちは微動だにしない。

「今回の子…どういう事？」
アリドラが前に出て聞く。
目の前の相手は何か知っているのだ。
自分が聞き出さねば。
「そうね…少し長くなるけど、その前に自己紹介もらえるかしら？降りてきた人と話すのは初めてだから」
アリドラはロナの事を含め話す。
今までの経緯を。
「私はアレト、依存のアレトよ」
ロナは退屈そうに床に座り込みあくびをする。
警戒していないその姿はアリドラを安心させる。

アレトは話し出す。
ゆっくりと優しいその話し方。
「私は上からきた者を今までに三人殺したわ、階段ができて、そして殺したら消える」
自分達のように複数で襲ったのだろう。
「それが私の役目。見ての通り動けないから、人を使う」
自分を囲む三人を見る。
「見て分かるでしょ？この子たちには意思は無い」
アリドラは黙って頷く。
言うとおりだ、襲ってきた少女たちは何か盲目的だった。
「だから私は”依存”…運ばれてくるこの子達は私の体液が必要なの”そういう状態”で運ばれてくるのよ」
「それ…」
アレトの真横。
彼女から繋がるパイプがゆっくりと
少し濁った透明な液体を一滴、一滴と貯めていく
中吊りの大きな硝子瓶のような容器。
「これで話は全部よ」

アリドラはしばらく考えるようにしてアレトをまっすぐ見た。
「聞きたいことがるわ」
優しく笑顔で応じる意思を示すアレト。
「運んでくる…って言ったわよね、それは…鉄仮面の女…なの？」
「そうよ」
「あなたは会った事あるの？」
「ええ」
可能性が見えた。きっとあれは外部からきてるもの。そう推測している。
「でも外にはいけないわよ？」
アレトがその考えを打ち消す。

「私の後ろ、その壁が開いてくる。この子達みたいな子を連れて
察しのとおりその向こうは外、でも近づかないほうがいいわ…見えない？」
薄暗いベッドの向こう側に目をこらす。
「……どういう…まさか！！」
「私もそこから出ようと試みた。空が見えるのよ。でもね　そうなる」
壁の一部分。
石造りの淡い茶の色。
ただそこだけが以異常に黒ずんでいる。
「どういう仕組みかはしらない。ここからは私の推測」
アレトがさっきよりもさらに静かに言う。
「不思議なことに、私はこんな近くに寝ていて外の空気が流れ込むのを感じたことが無いの」
こんな距離で外に繋がる壁が開いて空気の動きが無いわけが無い…
アリドラにも容易に想像できる事。
「きっと外の空気は私たちにはの毒。一度ここに入ったら出られない」
大胆な憶測だろうけれどあの染みはそうなのかもしれない。

「近づいたらだめだよ。ぶしゃってなっちゃう」
ロナが心配そうにアリドラに言う。
「その子は特別なのね…　ごめんね餌の時間だわ」
そういうと、弱々手を伸ばし近くのコックをひねる。

ピチョン…ピチャピチャ…

繋がった硝子容器の下からその中を満たす液体が垂れる。
「いいわよ」
アレトが三人に声をかけると一斉に群がる。

わずかに床に溜まったその液体に、飢えた犬のように群がり必死に舐めとろうと。
「……」
その光景にはアリドラは言葉が出ない。
「おぞましいでしょう？でもこれがこの子たちの全て、名前も呼び名も私…全部アレトよ」
ざらついた素材の床に顔を押し付け舐め続ける少女たち。

「ねぇ　ロナちゃん」
「なに？」
アレトがロナに話しかける。
「私はもう死ぬのでしょう？」

「そうだよ　これにかいてある」
通達を見せる。ロナ宛の絵で表現されたそれ。
頭の三つある犬の絵、その背後に描かれた階段。
「ち…違う意味かも知れないわ…ロナ…」
アリドラがその会話をとめる。
「ちがわないよ」
まっすぐな黄色い瞳。
「どうしてアリドラはいちばんさいしょ階段をおりたの？」
予測していなかった質問に戸惑う。
あの時は火に追われて致し方なく。
「強い子ね。ロナちゃん、死ぬ前に試したいことあるの…いいかしら？」
「うん、いいよ」
アレトは微笑むと再度あのコックをひねる。

ピチャ…　ピチャ　ビチャビチャ！

大きく開いて勢い良く液体が床に散布する。
「いいわよ」
三人が飛び掛る。

ビチャビチャビチャ…！
どんどんこぼれていくその液体を浴びるように飲む。
「最初の通達で決められた量以外あげたかったの…いつもがんばってくれたから」
容器の中はどんどん無くなっていく。

「ぐぎゅ…うがぁあああああああ」
一人が叫ぶ、目を真っ赤にして。
「がががぁあああぐぐあう」
そしてもう一人。

「こうなるのね…」

三人目も叫び、ほぼ同時にアレトに飛び掛る。

ビチュ！！ビチュ！！！
アレトは一瞬で覆われて…そして喰われている。
三人の少女は、獣のようにアレトを食いちぎる。
繋がったパイプが外れ、ベッドが赤くなる。
肉を食いちぎる音
骨を噛み砕く音
柔らかい部分に顔をうずめる啖り声

「…ロナ……やばいよ…」
アリドラが逃げようと促す。
目が逸らせない少女たちの腹が膨らんでいる。

それほどの勢いで食べているのだ。
「大丈夫だよ」

「ぎゃ…　　」
一人の体が仰け反る。
「グゲボァア！！」
胃の中を満たしたアレトだったものが一気に口から噴出す。
そして他の二人も同様に。
臓物まで吐き出しているようにのたうちまわる三人。

しばらくして静かになる。
ベッドには静かに眠ったような顔の　胸から下腹にかけて無くなったアレト。
散らばるように吐き出したものにまみれ死んだ三人。

「う…うげぇ…」
緊張の糸が切れアリドラも思わず吐いてしまう。
「見てアリドラ、あれ」
ベッドの足元の床に長い隙間ができていく。

音も無く…その隙間は広がり見えてきた階段。
「う…うぇ…　つっ…これは…」
今まで降りてきたものと同じ造り。

ズリ…ズリ…

斜めに開く床をベッドがずり落ちる。

ガゴン！！！ゴ……

落ちていく。

アレトと三人の少女たち。

第九話

「降りるのね…」
アリドラが言う
「うん、そうしないといけない気がする」
正直もう疲労と恐怖で動きたくない…
ロナはそれでも進むという。
進まなければ何も変わらない。アレトの言っていた事が本当ならば、何か”ここ”には秘密があるはず。
きっそそれの解決あこの階段の先にあるのかもしれない。
「あ…」
ロナは先に階段を進む。
「ロナ…まって…」
一人になんかなりたくない…ロナがいなければ今までどうなっていた事か…
「アリドラ！すごいよ！！」
歓喜の声。
よろよろと追いついたアリドラが目にしたもの『階段の下でベッドに押しつぶされたアレト達』
「アリドラ！アリドラこっちだよ！」
ロナは気にならないのか。
さっきまで話していた相手がこのような無残な姿なのに。
言われるままにその階を見る。
「すごい…」
アリドラも思わずそう言ってしまう部屋。
階段から降りてそのまま部屋になっていたのはアレトのところと同じ。
綺麗な白色の壁。
天井から吊るされた少し豪勢な、無数のランプの光は、優しく部屋

全体に届く。
大きなテーブルの上に盛られた食事に果物。
「クッキーあるかな？」
ロナは思わず走り出す。
「あ…まちなさ…」
罠かもしれない。今までの流れを考えたらこんな事ありえない。
それでも体は正直に目の前の食事を求めてしまう。
「アリドラ…食べないの？」
早速いろいろと頬張りながらロナが聞く。
「た…食べるわ…」
ナイフやフォークを探すが見当たらない…
「…んん…いいや」
アリドラも目の前の熟れた果物を手づかみで口にする。
「あ…はぁ…」
生き返る。染み渡る甘美な果汁。
酸っぱさが目を覚ますように甘さの中に溶け込んで満たす。
「うぅ…」
口元にこぼれたその赤く甘い汁。
「……」
ロナはいつもどおり、マナーも無く、何も気にする事無く口いっぱいに食べ物を詰め込む。
少し間を置いてがっついてアリドラも食べだした。

「はぁ…お腹いっぱいね」
柔らかい絨毯の床に大の字で寝転がるロナに話しかける。
自分でもおかしく思ってしまう。
「あんな食べ方…はじめてだけどおいしいのね」

「ん？なにが？

「なんでもないわ……あれ」
アリドラは微笑むと何かを見つける。
「お風呂…」
部屋の壁、開いた扉から見えるバスルーム。
血と埃、煤にまみれた自分の体。
ロナのほうがぐちゃぐちゃではあるが、自分自身も負けないくらいの汚れっぷり。
自慢の柔らかい金髪もバリバリで台無しだ。

「ロナ！！ロナ！！お風呂はいろう！」
アリドラはロナの手を引く。
満腹のロナは少ししんどそうに引きずられる。
「おふろってなに？」
そんな事を聞くロナに思わず笑ってしまうアリドラ。

「きもちぃいいいい」
ロナは上機嫌だ。
アリドラに体を洗ってもらいながら伸びをする。
「コラ！動かないで、洗えないじゃない」
白い泡が血を含みピンク色になり広がる。
「きれいだね　きれいだね」
ロナは嬉しそうだ。
アリドラの目にもそのピンクは、先ほどまでの惨状を忘れさせるくらいかわいらしく映る。
本当に幼い子のようにはしゃぐロナの髪を手で梳かし、その純な流れを戻す。

「お湯たまったわ」
バスタブには並々と綺麗な透明の湯。
ご丁寧に浮かべる用のバラの花びらまで用意されている。
器を沈めると静かにひろがる真紅の花。
「うわぁあ」
ロナが歓喜の声をあげる。

「じゃあ入るね！」
「あ…」

バッシャァアアアアアア

「うわっぷ…ロナ　馬鹿！」
ロナが勢い良く湯船に飛び込んでいた。
「あはは！アリドラ　変な顔！」
「ちょ…なによ…あ　ぷ…」
湯気の向こう、鏡に映る鼻の頭に花びらがひっついた自分の顔に思わずふく。
「アリドラのおはなにはながさいたー」
ロナが大声で歌いだす。
「もう…」
少し恥ずかしそうに、でもなんとなく優しい気持ちでアリドラもバスタブに体を沈める。
二人には少し狭い。
体が触れる。

柔らかいバスタオル。

新しい服。
「どれにする？」
そう言ってしまう程の数が大きなクローゼットの中に。
どれも上等な生地。
「ん…アリドラに任せる」
白いフリルの洋服　まるで姉が着てたような。
「ロナ…これを着て」
それをロナに着せる。アリドラは今までと同じような黒い服を見つけそれを着込む。
「しろ」
ロナがスカートの裾をバタバタとして遊んでいる、クローゼットの下アリドラが見つけた靴をロナに渡す。
「靴はそれにしましょう」
少女達の小さな足にぴったりな、編み上げの頑丈そうなブーツ。

しかし、どうしたものか。
ここでは襲われるわけでも、何か起きるわけでもない。
誰もいないこの部屋がゴールなのかと思えてしまう気すらする。
この豪華なものを取り合う戦いだったのか。
だとしたら凄く悪趣味なものに自分達は巻き込まれていて…
「ふぁ…眠い」
ロナが猫のようにアリドラの横でまるまる。
足を固めたブーツは無意味なのか…アリドラもそんな事を思いながら眠りについてしまう。

「……ん」
目を覚ますとロナはまだ寝ている。
やはり何も変わらない。
少し喉が渇いた。

テーブルの上の水差しからグラスに水をとる。
「……」
部屋を見渡してみる。
何も特に目立つものは無い。
ロナはまだ寝ている。
向こうの暗がりには、アレト達の死体があるのだろうと思うと少し不気味だ。
明るいほうから暗いほうを見ると良く見えない。
それが救いなのか。

ゾクッ…

目を逸らそうとした時
嫌な悪寒。

「……」
気のせいか。
ロナの傍に戻ろうと一歩、一歩後ろに下がる。
「気のせいよ…」
なんとなく目をそむけることができない。
「きゃ！！」
足に何かが当たる。
「ロナ…か…」
ロナはまだ眠っている。
その体に寄り添うようにアリドラも横になる。
柔らかい絨毯。

しばらくして目が覚めた、気がついたらまた眠っていたのか。
布団をかけているわけでもないのに凄く快適に眠れる。
体の疲れは本当に抜けた。
「まだ寝てる」
ロナはまだぐっすりと。
あれだけ戦ったんだから疲れているのだろう。
寝起きはやはり喉が渇く。
また水差しから水を汲む。
あちらの暗がりは見ないように。

「ふぅ…」
そのまま、またロナの傍へ。
さすがに眠れる気がしない。
細い艶やかな長い黒髪を撫でる。

暖かい空気、暑いわけではない。
ちょうどいいとはこの事なのか。
ロナを撫でる手とは反対の手で絨毯を触る。
「高そう…」
独り言。
退屈さをかんじてしまうくらいの穏やかな時間。

「あれ…」

また眠っていたのか。
どれくらいの時間を過ごしたのだろう。
寝すぎた気だるさ。
「ん…」
喉が渇いたけどいいやと、まどろみに身を任す。

「ん…」
さすがに寝つきが浅いのか…
喉が渇いた…
ロナの寝息が小さく聞こえる。

「ん…～」
さすがに喉の渇きが限界だ。
しょうがなく体を起こす。
「んん…」
ブーツを履いたままだから足がむくんでいるのか。
少し適当に脱ぎ捨てて水差しを取りにいく。
絨毯の感触がきもちいい。

グラスに注がれていく水を見ていると喉がなる。
「……　」
違和感
何か違和感がある。
なんだろう、なんだろう。
確かにこんな環境で違和感なんておかしな話。

グラスの水を飲み干してテーブルの上に置く。
水差しの横に。
何回同じ事を繰り返したのか…

「嘘……」
アリドラは気がついた。
グラスの三倍くらいしか容積の無い水差し。
今自分が飲んだのは三杯目…
「戻ってる…？」
水差しにはまだ半分以上入っている、自分は三倍飲んだ。
誰かが、水を足しているのか。

ゾクゥ…

不気味な今の状況に背筋に何かが走る。
「ロナ！！ロナ！！おきて！！！」
かけよってロナを必死にゆする。眠ったまま起きない。
「い…嘘…嘘…どういう事？？」
焦りながらブーツを履く。
紐も満足に結ばないままた必死にロナをゆする。
「おきて…ねぇ…ロナ…なにかがおかいしの…おきて…」
ゆすれどゆすれど起きる事の無いロナ。

「ばかね」

低く聞こえた誰かの声。
声も出ないくらいはっきりと。
耳の奥まで届いた声。

「嘘…でしょ……」
声の主の足音が聞こえてくる。
近づいてくる。
振り向きたくない。
でもあの声、振り向いてしまう。

「おねぇちゃん…」
振り向いたアリドラ。
自分の生き写しのような、死んだはずの姉”レイラ”の姿。

第十話

レイラだ。
どう見ても。
二つに結んだ自分と同じ色の髪…勝気な瞳。
寝息を立てるロナが着ているものと同じ白い服。
「どうして…」
アリドラの脳裏に浮かぶあの燃え爛れた死体。
姉は死んだはず。

「酷いわね…私を殺した子に私の服を着せるなんて」
熟睡を続けるロナを見る。
「その…ロナが…やっぱり…」
「じゃあ誰が私を殺したの？」
アリドラを抱きしめるレイラ。
「かわいい妹…私とこの暖かい部屋で暮らそう」

ドン…

「ち…違う…レイラ…じゃない」
突き放したアリドラ。
「アリドラ…何言ってるの？」
伸ばした手が震える。
「一度も…抱きしめてくれたことなんて無い！！」
顔を見ないまま、足元に大声で言う。
「姉のいう事は一回で理解しないさい」

ビクッ…

その台詞、それがアリドラの思考をとめる。
「レ…レイラ…」
また抱きしめられる。
「私もあなたが”おねぇちゃん”と呼ぶのははじめて聞いたわ」
暖かい。
この部屋の温もりなど比べ物にならないくらい。
足の力が抜ける。
「あなたは双子の妹…だからずっと私を”おねえちゃんとは呼ばなかった」
何か申し訳ない気持ちになる。
「私達は勝つのよ…生き残る…全てが与えられるわ」
苦しいくらいに抱きしめる力は強くなる。
「…ちゃん…おねぇちゃん…おねえちゃん…」
今まで不安だった。
ロナが来る前からずっと。
ここに連れてこられた時から。
いつもどんなにみすぼらしい生活でも、自分を引っ張ってくれた。
そんな姉だった。
貧乏で、寒い日二人で物陰でくっつくように寝た。
そんな事を思い出す安堵感…

「この建物の中の技術はすごいわ…あの死にかけた私をここまで元通りにしてくれたんだから…」
そういいながら袖でアリドラの涙を拭うレイラ。

「アリドラ…そこにいて」
優しくアリドラを放しロナのほうに向く。
「簡単な事だったの。あの子が全ての元凶…この子はね…”滅び”のロナを殺せば全て元通りになるわ」
その手には、鋭利なナイフ。

”滅び”それがロナの呼び名なのか。
ロナを殺せば何か変わる。
それが私達ここに連れてこられた人間のゴールだと姉は言いたいのだろう。
確かに今まで皆がロナを狙い殺そうとした。
きっとそうなのだろう。

レイラがロナの横にしゃがみこむ。
「アリドラ…これで私達は救われる…」
振り上げられたナイフ…

アリドラはロナを見つめる。
ただの眠りこけた、少し痩せ気味の少女。
長い黒髪は艶やか。
この子はそんな役目を追わされただけの、それだけの存在。
あまりにもあっけない終わりはもうすぐなのだ。

「アリドラ…」

ロナの寝言。
小さく、呟くように。
何の夢を見ているのだろうか、無垢な笑顔で微笑んで。
「アリドラ…よかったね…」

ガ……

「ア……アリドラ…」
叩きつけられた水差し。
血をボタボタと頭部から流したレイラが振り向く。
「違う…レイラじゃないよ……私は…」

ガシャ！！！

レイラの顔面で陶器が割れる。

「痛…アリドラ…何するの…痛い…顔…痛い……」

落ちたナイフを拾い上げる。

シュパ！！

「痛い…アリドラ…やめ…顔…顔がいた…」
斜めに薄くついた傷からプツプツと血が。

「あなたはレイラじゃない…」

シュ…

「きゃぁ！！いた…顔痛いよ…痛いよ…」
懇願するようなレイラの目がアリドラに向く。
「その顔を返して…私達姉妹の顔…」

シュパシュパ！！シュパ！！

開いた傷、溢れる真っ赤な鮮血。
顔中を切る…誰だかわからなくなるまで
逃げようとしても馬乗りになって切る…誰だかわからなくなるまで

「顔が痛い！顔がいたい！！！顔が痛いぃいいいいいいいいいいいい」
飛び散る血しぶきの中から聞こえる声
「顔が痛い…顔が痛い顔がいたい…いた…い…い……　はひゅ！！！！」

「私は…ここに連れてこられてから…何回もよんだよ…」
喉に突き刺さったナイフ。
もう動かなくなった。
ナイフを抜くと血が噴出しアリドラを染める。
「何回も…何回も…何回も…よんだよ……おねぇちゃんって！！！！！！！！！！！！！！」
高く、振り上げる。

パシッ…

その手は振り下ろされる事は無かった。
「もう死んでるよ」
ロナがアリドラの手を掴んだままそう言った。

第十一話

「ああ…ロナ…あ…あ…」
黄色い眼に反射する蝋燭の明かり。
「私…わたし…あなたを助ける為に……」
縋りつくようにアリドラは話し出す。
それを黙って聞くロナ。
「わたし…助ける為に…助けるためなの…ロナをたすけようと…」
ほんの僅かな沈黙。
「…ロナ…いつ起きたの…」
ロナは答えない。
「だってしかたないじゃない！！！姉の顔で…絶対こんなやつおねえちゃんじゃない！！違う！！
　許せないよね…殺されても仕方ない！！ロナだってたくさん殺してる！！ここはおかしいところだから…」
ナイフを持った手を　ロナが放す。
「ロナ…ロナ…何で何も言わないの？私だってあなたを助けたかった…それは本当…」

ゴ……

ロナの後方。おりてきた階段のほうから音がする。
きっと下に続く階段。

「アリドラ、いくよ」
ロナはそっちに向かって歩き始める。

「まちなさいよ！！！」

叫ぶ。
立ち止まり振り向くロナ。
「…アリドラの言うとおり、それはレイラじゃないよ」
それだけ言うとまた歩き始める。

「ちょっ…待って…　違う…違うのね」
ふらつきながら立ち上がり後を追う。
「はぁ…はぁ…私を安心させる為にそういう風に言ってるのじゃない？違う？」
追いつくアリドラ。
ロナはただ一言「ちがう」と返して進んでいく。
「ロナ…どうして…なんでそんな態度なの？ねぇ！ねぇってば！」
暗がりの壊れたベッド。
その脇の、新しい階段。
「アリドラ、それすてたら？」
手にした血濡れのナイフ。
「アリドラには必要ないよ」
放せないその手から、ロナは奪おうとする。
「…！？」
思わず手を引いて渡さないとしてしまうアリドラ。
「…アリドラ　はなさなきゃだめ」

トン

簡単に蹴り上げられただけ。
痛くも無い。

後ろのほうで柔らかい絨毯がナイフの落ちる音を緩和する。

「アリドラ、おいで」
ロナが手を差し伸べる。
俯いたまま、その手を見ないように…
「わかった、いこう」
その手は握られないまま、二人は階段を下る。

「仲良くしなきゃね、この私は殺せないよ」
出迎えた新しい階の住人。
アリドラよりも少し上の年齢か。
「いそいでるの、アリドラがもう限界だし」
ロナが前に出る。
「その階の主要人物を殺せば階段は開く…らしいわね」
一つに束ねた栗色の髪。
ロナの前に通達を投げる。
「驚いたわ、そんな通達」
アリドラが拾う。
その絶句する内容。

『上からくる殺人者を裁け』

「持ってきた人が教えてくれたわ、私を殺して先に行くつもりなのでしょう？」

ヒュン…

ロナに何かを投げる。

パン…

「つぅぁああっ！！」
簡単にそれを手で払ったつもりだった。
投げられたのは小瓶。
薄い硝子が割れて中の液体がロナの手に付着した。
「ロナ！」
ロナの手が煙をあげている。
「うぁ…あつ…」
皮膚を一瞬で爛れさせたその中身の液体。
「”裁き”のイム…殺人者の裁きはいつの時代も同じよ」

バッ…

自己紹介と共に、無数の小瓶がロナの頭上に投げられる。
「あ…」

ガシュ！！ガシュ！！！ガシュ！！！！

「うっぁあああああああああ」
床すらも溶かす強い酸がロナに飛び散る。
上から落ちロナ当り割れるもの、床で割れて飛び散るもの。
「くは…あ…」
強い回復力で乗り切ったロナが、火傷で塞がれていない片方の眼を開くとまた降り注ぐ瓶。
「うあぁあああああああっ…」
イムの横には酸を入れた瓶が大量に入った木箱。
アリドラはいきなりの状況に動けず足を震わせるだけ。

「このやろ…」
なんとか前を見たロナが、イムのほうに走り出そうとした瞬間…
ガン！
「うぎゃっ！！」
そのまま倒れる。
イムの手には拳銃。
「化け物みたいな回復力ね、それで今までたくさん殺したのね」
ガン！！ガン！！
「ぎゃふっ！！あぐっ！！」
肩口と横腹に一発ずつ。
「被告は裁判官に触れれないのよ？」
バッ…
また空中に展開される小瓶。
「ひ…」
ロナが怯えて頭を抱える。
ガシュシュシュシュ！！！
「ぐぅうあぅうううううううううう」
「お友達は何か言う事あるかな？」
次の小瓶を両手に持ちアリドラに話しかける。
「見てなさい？殺人を犯したものの最後」

わたしも殺人者…そう言おうと思った。
一瞬だけアリドラはそう思った。
ただ言えなかった。

「うぎゅ……」
ロナは溶けた皮膚が床に張り付く痛みに動く事すらできない。
服もほとんど酸に焼けてしまい、痛々しい体が露になっている。

「さ、次投げるわよ」

「たすけ…」
ロナの小さな声は硝子の割れる高い音に飲み込まれる。

「あら、まだ死なないの…タフね」
再度取り出した拳銃。
「これで裁きを完了ね」
狙う先は脳天。
「賢いお友達ね、殺人者を友達だからって助けるのはおかしい事だものね」
アリドラはもうロナを見ていない。
背中を向けて。
降りてきた階段がアリドラの眼に映る。
「っ…」
唇をかみ締めて一気にそちらに向かって走る。
「じゃあ、さようなら殺人者さん?」

バチュン!!

「つぎゃぁああああああ」
あまりの絶叫に振り返る。
「はぁ…はぁ…」
体を起こすロナ。
ここまでベリベリと皮膚の音が聞こえてきそうな姿。
拳銃を落とし、イムは顔を押さえてのたうつ。
ロナが”自分に投げられて割れなかった瓶”を投げつけたのだ。

「あぁあああああ　顔がいたいぃいいいいいいい」

アリドラが硬直する。
同じ言葉。

「はぁ…はぁ…はぁ…」
イムがやっとの思いで顔を抑えた手をどけようとした瞬間。

「ぎゃぁああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
その間近まで歩み寄ったロナが、顔を掴み、まだたくさんの瓶の残る木箱の中にイムの頭を叩きつける。

「がぁぼぼぼぉぁぐごがぁぼ」
人とは思えないような声が響く。
木箱の外にある首下がありえないほど動き回る。
ロナは自分の腕が焼けようが、その顔を抑えて押しこんだ手を放さない。
跳ねる酸に顔色も変えず。

ビグン！！ビグン！！

二度大きく痙攣するとその体は動かなくなる。

「アリドラ、ありがとう」
ロナが振り向く。
さすがといったところか。いくつかを残してだいぶ綺麗な顔に戻っている。
「アリドラが逃げてくれなかったら、二人とも殺されてた」
アリドラはその意味を理解した。
アリドラも殺人者にはかわりない。イムがロナだけが殺人者だと思っていなくて、正しい裁きを行っていたら…
ロナは決して嫌味で言っているわけではないのはわかる。
階段を戻るアリドラ。
「……ロナ…もちろん…私もここの仕組みが分かってきて…なんとなく…逃げたわけじゃなく…」
言い訳である事は自分自身よくわかっている。
本当に怖かっただけ。ロナが純粋に感謝しているのが痛い。

「うん、なんとかアリドラとなんとかしていかなきゃね」
ロナが笑顔で言う。
あちこちが痛いのだろう、少し無理しているみたいだ。
「うん…そうね…きっと何か…ゴールはあるのかもね…」
申し訳なさから眼をそらす。
「…!!」
ロナの右手はほとんど骨、少しだけ肉を残しただけの肘から下。

「ご…ごめ…ごめんなさい…」
アリドラがガクリと膝をつく。
眼に涙を貯めて。
「ごめんなさい…ごめんなさい……ごめんなさい…」
溢れる涙。

「アリドラ…泣かないで…っ…」
骨にそって肉が戻っていく。
額に脂汗を浮かべているロナ。
「痛いの…？」
「うん痛いよ」
ロナが笑顔を作る。

「少し休みましょう…」
ロナと並んで座る。
アリドラに体をよりかけるようにしながら深呼吸をする。
「ロナ…階段一緒におりよう」
イムの死と同時に出現した階段。
下から誰かが来たりは今のところ無い。

第十二話

「ロナ、もう大丈夫？」
完全に見た目は戻ったロナ。
「うん大丈夫！」
元気良く腕を振り回してみせる。
一つ上の階に戻りアリドラがとってきた服に着替えながら。

「あのさ…ロナ…」
「何？」
「怖かった？」
「うん」

短い会話。

「この部屋は何？」
モニターに囲まれた椅子に座る主に聞くのはアリドラ。
「監視部屋だけど？」
眼鏡をかけた少女がそれに答える。
今までとは違う雰囲気。なんというか普通なかんじといった言葉が似合う。
「監視ね…あなたは監視の…」
モニターに映っているのは今までアリドラ達が通ってきた階。
「そ、”監視”のハルね。よろしく」
二ヘラと笑う彼女に少し調子が狂う。
「あ！殺したらあかんよ！あたしの下の階は無いからね」
大振りなジェスチャー。本当に焦っているのだろう。
その部屋の主を殺せば階段は出てくる、そうなのだから。

「ハルだっけ…あのねあなたに教えて欲しいことがいくつかできたわ」
モニターにはいくつか知らない部屋が映っている。
上の階なのか、それともハルが嘘をついていたら下の階なのか。
「あ、あれはな、通達で見せちゃいけない事になっているんよ」
いくつか電源の入っていないモニターも存在する、アリドラがそれを気にするのに気がつきハルが説明する。
「ぼくが無理やりすれば見れるよ」
ロナの発言に飛び上がるハル。
「いいいいいや、このシステムは私が死んだら全部見れなくなるよ！！！…多分…」
自信なさげだ。
「ロナは大人しくしてなさい」
言われて不機嫌そうに座り込む。
「さて、質問に答えて。それも通達で禁止されていなければだけど…」

「えーよ。なんでも答える」
「あ…レイラは…」
アリドラは一番聞きたかった事を言おうとした。
姉は誰が殺したのか。
ふと、何かが引っかかりそこで止まる。
ロナ、信じるといったのにここで聞いたらきっと傷つく。
そして今は信じている、本当に。
断言できるほどではないが、それに近いくらい。
「どしたん？」
ハルが不思議そうな顔で見る。
「あ…その…レイラの偽者いたでしょ…呼び名を聞いていなかったから…知ってる？」
苦し紛れの質問。

「あ～あれな。あれは”偽装”簡単に言うと整形。整形シーンえぐかったなぁ…見る？」
棚からビデオテープを取り出す。
そこに記録されているのだろう。
アリドラはそれを苦笑いで断りながら胸を撫で下ろす。
姉ではなかったんだ。
「まぁこんな事この施設で言うとおかしいけど、死んだ人は生き返らん…っと次の質問ある？？」
ハルはアリドラの表情を見てまた焦る。
「あ…そうね…その…　ここは何なの？」
いざこういう状況だと思いつかないものだ。
そんな不甲斐なさをかんじる。
「ごめん、わからん」
返答も想像通り。
その後しばらく会話をしたが埒が明かない。
見れない部屋については何も答えれない、それが彼女の通達に書かれているらしい。
「この後、上に行くのが正解なの？」
それもノーコメント。

「上にいこうか、ロナ」
アリドラがそう言った。
これからまた危険だろうし、上ったところでなにも変わらないかもしれない。
でも何か前向きな気持ちが育っていた。
「成長してますな、アリドラさん」
少し茶化すようにハルがそうアリドラに。
「…そうかな。どうだろうね」
ハルがとりあえずと奥から何かをとってきた。
「クッキーーーー！」

ロナが歓喜する。
飛びついてハルもひっくり返る姿にアリドラが笑う。
階段を上がろうとした時呼び止められた。
「とりあえず、個人的にな。上行くのは賛成できるよ、ただあたしも見れる階は全部じゃない、それだけ覚えといて」
今までとは違う真剣な顔。
「ありがと……あのさ…一緒に来ない？」
その誘いは首を横に振られる。
来れない事情…きっとそう通達に書かれているのだろう。
気まずい空気。
ロナに手を引かれて階段を上っていく。

「あんたが本当に聞きたかった事、多分思ってる通りやよ！！」
階段を上りきった後。そんな声が下から聞こえた。

今ままで来た道を戻る。
死体は片付いている。
一つも血の跡すら無く。
姉ももう無いのだろう。
安心して階段を上がれる…

「この上ね」
そこからは知らない階。
焼けたはずの煤も無く、他と同じように普通の階段をあがる。
一段一段と、ブーツの底で踏みしめて。

第十三話

見てるのかな、ハルは…とそんな事をふと思う。
何も無い部屋。
誰も特にいない。
「さてどうしたものかしら」
来たものの何も無ければ何も出来ない。
「しろいへやーしろいへや〜♪」
ロナはそんな部屋を形容する歌をつくって寝転がる。

「……もうしばらく居てみる？」
「まかせるー」
退屈すらかんじる。
正直期待感すらもって階段を上がってきた結果がこれ。
何も無いにこした事は無いが、これは無さ過ぎる。
あの柔らかい絨毯の部屋から持てるだけ持ってきた食べ物が無くなる位はここで過ごしている。

「アリドラ、おなかすいた」
それもそうねと『とってきて』と駄々をこねるロナを起こし一緒に階段を下りる。
「…！！」
下の階は自分の部屋のあったところ。
そこまでは降りれる。

「嘘…」
その下へ降りる階段を阻むのは…水…
階段の降り口ギリギリまでしっかりと水が…

「……アリドラおりれないよ」
ハルはどうなったのか、ここより下の階は全て水没したとしたら…
想像したくない絵面が浮かぶ。
「ロナ…上に行くわよ…！！」
「え？え？？」
ロナの手をひき足早に階段を上る。
「アリドラ？どうしたの？」
上がるやいなや、壁を調べ、床を叩く。
「どうしたらいいの…どうしたらいいの…」
何も見つからない。

それからかなり時間がたった時。
アリドラの最悪の予想が現実になった。
「…アリドラ水増えた」
階段から覗けば、見えるくらい水がせりあがってきている。
「……」
いずれこの部屋も水没するだろう、それまでにどうすれば。
「ふぁあああ」
呑気にあくびをするロナ。アリドラの焦りはどんどん高まるばかり。

「ロナ…どうしよう…」
そういえば今までロナは何かわかったような口をきいたことがある。
あの”血縁”と”依存”の死際の時の様に何か
「どうしよう…」
振り向いたロナは涙目だ。
「ぼくおよげない」
この状況を泳いでどうするのか…一応ロナレベルではあるが、この
部屋が水没間近なのをかんじているのだろう。
水はもう足首まで来ている。
「はぁ…はぁ…」

焦る。
焦っても何もないのに焦る。
思考が上手く回らない。
水につかり体温が下がる。

足から水面に波紋がひろがる。

「アリドラ…たすけて…」
応えてあげられなかった言葉。今回も…
そんな思いがアリドラに強くロナを抱きしめさせる。
自分の恐怖も紛らわせるように。
「ロナ…だいじょうぶよ…」
強く優しく言い聞かせる。

今まで、なんとかなった。
私達はきっと何か特別なのかもしれない、少なくともロナはあからさまに特別な存在だ。
きっとここでは死なない。
そんな思いを心の中で反復する。
「アリドラ…やだやだ…」
水の増す速度が上がっているような感じがする。
膝…お腹を越えて胸…
背の低いロナは首辺りまで
「アリドラ！アリドラ！！」
強くしがみつく。
「あっ…」

ガボン…

足がすべり体が水没する。

水をたくさん飲んでしまった。

ガボボボ…

もがいて上にあがろうとする、しがみついて離れないロナは眼を強くつぶり、それがさらに二人を溺れさせる。

苦しい…離れて…お願いだから…

そんな事まで思ってしまう中やっとかきあげて　届いたのは　水に満たされてしまった部屋の天井

絶望感が襲う。

力が抜け、肺の中の空気の大半を失った体が沈む。

綺麗に揺れる透明を透かして水が行き止まった天井が見える。

ロナの体が離れていく。

意識を無くしたのか。

コポ…

最後の空気が口から出て行く

「…！！」

真っ白な天井の亀裂。

アリドラが自分よりはやく沈んでいくロナの足を強く握る。

ロナの泣き叫ぶ声がうるさい。

体が冷たい。

「アリドラがしんじゃったぁあああああああああああ」

死んでない、疲れてるだけ。

本当にうるさい…

「え…」

バッ！

いきなり顔を上げたことに驚いて飛びのくロナ。

恐ろしい倦怠感が襲う。

「アリドラ！！生き返った！！生き返った！！」

うるさい。

ちょうど一人分くらいの床の穴、そこはぎりぎりまで水。

同じ大きさの板がすぐ傍に。

「ここが水で押し上げられたのね…」

そうか、自分があの亀裂を見つけてロナとここまで泳いだのか。

火事場の馬鹿力なのか、そんな事ができた自分を誇らしく思う。

「それで…ロナ…あれは誰かしら？」

ようやくはっきり戻った意識で一番最初に認識するものとしては最

悪だ。
馴れたとはいえ、血まみれでうつぶせになった少女。
「やっつけた」
そうでしょうねと思う。
後ろには上にあがる階段が出現している。

ロナは自分を置いていかなかった。
本当に死んでいたらどうするつもりだったのだろう。

第十四話

「やっとのぼってきたね…」
再会は同時に絶望を意味する。
ハルが階段の上であぐらをかいて座っている。
「溺れてきがついたらこの部屋にいた、ほんで階段下りるなと通達一枚」
ペラペラと通達をふってみせる。
みんなわかっている。
ほぼ１００％に近い答え。
ハルを殺せば上に上がれるという事。

ロナがハルに近づいていく。
「ロナ！！まって」
思わず止めてしまう。

「一応覚悟きめてるから、そういうんは無しにしてほしいな」
少し嬉しそうにも聞こえる。
「アリドラ…でも…」
ロナが戸惑う。

「なんとかするわよ！」
大声が部屋に響く。

ゴン…

音がした方向。
壁が開く。
空…
「あ…」
鉄仮面をかぶった女の人が入ってくる。
壁の向こうは空、そしてこの建物の外の階段なのだろう、鉄柵が見える。
「いったらいかんよ。私達は死ぬ」
ハルの制止でアレトの話を思い出す。
確かに外の空気が流れ込んでこない。ハルはきっとモニターで見てきたのだろう。
鉄仮面の女が近づく…

「ロナ…そいつを…殺して！！！！」
思わず出た言葉。
直感で思った、それが何かに繋がると。

「むりだよ…だって…アリドラだし…」
意味の分からない答えが帰ってくる。
「ど…どういう…事？」
ロナに通達を渡して鉄仮面の女は帰っていく。
壁が閉じる。
「アリドラ…読んで」
文字で書かれた通達。前のように絵ではない。

「ロナ…ハルを殺して…」
通達の内容を小声で言う。
ロナが、黙ったままのハルを殺す。
簡単に首がひねられ静かになる。

「どういうことなの…」
天井が開き階段が下りてくる。
ゆっくりと…

「どういうことなの……」
ロナには言わなかった通達の内容がある、それがこの先の部屋。

ロナよりさきに階段をあがる。
「ついてこないで…」
ロナをその場に止める。

部屋をあがると、壁にくくりつけられた少女。
その前にはありとあらゆる武器。
少女は言葉を発せないようにか、何かで眠らされている。

「アリドラ…」
ロナがついてきてしまっている。
「…ロナ…眼をつぶっていて」

大降りな刃物を手に取る。
「アリドラ…」
「時間が無いの！！！」
そのままそれをその少女に叩きつける。

「がぁっ…」
胸がわれ血が噴出し　そして目が見開かれる。
浅い。
もう一度振り上げて、

ゴゴゴゴ…

「アリドラ…水が…」
追いかけるようにあがってくる水。
「わかってるわ！！」
血泡を吹く少女に深く刃物に体重をかけうずめる。
口から吐き出された何かが生暖かい。

「ロナ！いくわよ！！」
突き刺したままに、足元の武器をいくつかひろい降りてくる階段に向く。

「う…うん…」

ゴン…階段の下段が地に着く。
「はやく！」
水はどんどんあがってくる。
かけあがり次の部屋。

「ぼくが殺そうか？」
同じ状況、大量の武器に、眠らされた少女。
「ロナがやったらだめなの！」
今度は床に寝ころがされていたのか、もう膝まできてしまった水に浮かんでいる。

ガン！！！

「あうっっ…」
さっきひろった銃で狙うが反動で外れる。
「いた…」
手首に広がる痺れ。
胸まで来た水。
「くそッ……」
浮いている少女の髪を掴み、強引に口に銃口をねじ込む。
「あああああああああ！」
重い音、水中に広がる頭の中身。

「はぁはぁ…ロナ…手をだしちゃだめだよ…」
水位があがり足が浮く。
降りた階段に溺れそうなロナの手を引きなんとか登る。

「どうしてだめなの？」
そんなロナを無視したまま、次の部屋でも同じ状況の少女を殺す。

「三人目…」
水に追われまた上に。

何回繰り返しただろうか。
そうしてたどり着いた部屋。

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁはぁ」
水はまだ下の階の中腹。

「これで…同じ…って事なのね…」
今までと違うこの部屋。
壁から頭だけ出された少女、そして少しだけ狭い。
体はきっとあの壁の向こうなのだろう。
そしてもう一つ…
「やめて…」
「助けて」
「いやあああああああああああ」
それぞれの意識の下、発せられる言葉は違えど全て殺さないでと懇願するもの。

「はぁはぁはぁ……」
部屋中に響く命乞い。
アリドラの手が止まる。

「あれだよ、あれを殺せば階段おりてくるよ」
ロナが指差した部屋の奥の一人。
それが階段の鍵となる存在なのだろう。
指名された少女は何を言っているかわからないくらい取り乱す。
ロナはアリドラに言われたとおり手は出さない。

ゴキュ！！！

アリドラが手斧で叩き割った頭は別のもの。
一番アリドラの近くの少女。
「どうしたのアリドラ！あの子だよ！！」
ゴキュ！！ゴキュ！！！！
一心不乱に順番にどんどん頭を叩き潰していく。
水が足元まで来ている。
「アリドラ！アリドラ！！なんで！！」
ロナの叫びは聞こえない。
「だめなのよ！！！全員私が殺さないと！！」
悲痛な叫びと断末魔。
「いぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああああぐぶうぶぶうううう」
アリドラが近づいた少女が頭を振り回して発狂する。
「あああああああああ！」
叫びとともに降ろす斧。
「う……」
深く刺さりすぎて抜けない。
「やめて！！なんで殺すの！！たすけ…！！！！！！」
斧はそのままにしてナイフを取り出し首をかき切る。
どんどん減っていく声。
ロナの指名した少女も殺した、言うとおり階段は降りてくる。
水はもうだいぶ来て、壁から首だけ露出した少女達の顎まで浸る。

溺死と撲殺の恐怖。
「アリドラ！！はやく上に行こう！！」
ロナ水からあがり階段から呼ぶ。

「あと三人…」
もう叫び声は聞こえない。
アリドラの胸元あたりの頭はみんな水没した。
水は赤くにごる。

「アリドラぁあああああああ！」
ロナの叫び声も途切れる。
水位がアリドラを越えた。
体が流されないよう水中で髪の毛をしっかり掴む。
目を見開いて、そこに確実にナイフを。

赤い水面は階段も飲みつくした。
上り口から見える水面は真っ赤。

「アリドラ…」
ロナがそこを途方に暮れ、寂しそうに見つめる。

ザブ…

「はぁはぁはぁ…はぁ」
アリドラが頭を出し、力なくロナのいる階に手をつく。
「アリドラ…！！」
ロナがアリドラの体をあげる。

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ…」
中空を見つめたままのアリドラ。

第十五話

その部屋の主は穏やかだった。
ロナにアリドラを休ませてから自分を殺せばいいとそう言った。
「同じ罪を背負ったのね」
そう優しくアリドラに柔らかいタオルを渡した。

「ロナちゃん…私はアリドラに殺されるわ」
彼女の呼び名は”犠牲”。名前はなのらなかった。
殺される為にまっていたと、そう言った。
長い金の髪が綺麗な、少女と呼ぶには少し年上であろう彼女。

「アリドラ、この先が最後。あなたが私を殺すことでこの子の罪の数を越える」
アリドラがロナに言わなかった通達の中身を知っているのだ。
『同じ罪を背負え　全て終わりたくなければ』
あの通達に書かれていたのはロナの名前だけではない、アリドラの名も記載されていた。
だから、同じ数を殺した。
悩む暇も無かった。その通達までの全ての経験がそうさせた。
「よくがんばったわね」
ロナの頭を優しく撫でる。
「アリドラ、あなたはどうなるかしら？」
そう言いながら、壁にかけてある槍を指し示す。
「それはこの先で必要よ、私は別の方法で殺しなさい」
アリドラは武器は全て水中で使い切っていた。

アリドラはその彼女に誘導されて首を絞めた。

両手で強く。
意識を無くして行きながら彼女は抵抗しなかった。
手の中で命が消失していくのをかんじる。
アリドラの頬を涙が伝う。
何故泣いているのかわからない。

「アリドラ…アリドラを殺すの？」

ロナが泣きながら言う。
「え…」
アリドラがその異常な言葉に反応すると、締める手に暖かい感触をかんじる。
「…うそ…」
”犠牲”と名乗った彼女が、アリドラが力を緩めないよう手を添えていた。
そしてその力はほとんどんなく弱々しく。

「ありがとう…」

アリドラは最後の力をこめた。

第十六話

槍を持ち、最後の階段をあがる。
ロナは泣きじゃくったまま。
きっと今何を聞いても答えられないだろう。
アリドラはそんな事を思う。
二人は最後の部屋に到達する。
ロナはそのままへたり込む。

「うっ…う…」
大きな荘厳な扉があるこの部屋にロナの泣き声だけが聞こえる。
そして部屋の真ん中の石段の上の通達が二つ。

一つはアリドラ
もう一つは『”不死”のロナ』へと書かれたもの。

「そう、あなたは”不死”なのね」
それがロナの呼び名なのか。
どこかで誰かの言った”滅び”。それは違うと思っていた。
そうだ、それを言ったのは”偽装”の呼び名の姉の顔。
なんだかその姉の顔もぼんやりとしか思い出せない。

自分の通達をひらく。
『隣人に無き物を与えよ』

「私は”与える”アリドラだったわね」
ああ、そういう事かと思う。
外から何かをもってくる鉄仮面の女。そしてさっきの”犠牲”…
確かに何かを与えている。自分に対して、”それのみを行った”存

在だった。
ロナは与えてくれる人に私と同じ認識をもっていたのか。
ロナのぶんの通達を勝手にみるのは気が引ける。
ここまでの状況を考えると、そんな普通の事を思う自分に少し笑えてしまいそうになる。

「ロナ…あなたはどうするの？」
泣いたままだ。

「あなたに無いもの、単純な謎かけみたいね」
そういうと槍をロナに向ける。
「アリドラ…」
ロナが口を開く。

「もう…ぼく……は嫌だ…」

「うん…」

槍がロナを貫通する。
わき腹から心臓へ真っ直ぐと。

「アリドラ…」

ロナは笑顔で最期を迎えた。

扉が開いた。

外の風が吹き込んできもちがいい。
青い空に白い雲が浮かぶ。
明るい光が暖かい。

もう少しだけロナといよう。
アリドラはそう思う。
静かに横たわるロナの隣に座る。
眠気が誘う。
暖かいからだろう。
それに身をまかせる。

最終話

どれだけ眠っただろうか。
薄ら目を開けても暗い。
少し肌寒さがある。夜なんだろう。
そろそろ外に…

……

少し頭が重く息苦しい
嫌な予感がして顔を触る
「……！？」
冷たい鉄の感触
「……！！」
声が出ない。

「アリドラ」

鉄の隙間から少しだけ覗く足。
痩せこけた細い…ロナの足。

「アリドラ酷いよ」

待って…そう言おうとしたが声は出ない。

「ぼくをこんなところにだすなんて」

そう言うとロナの足は外へと向かっていく。

アリドラがその隙間から見える世界で、必死に探して見つけた二つの絶望。

扉の外の景色どこを見ても同じ。
まるで同じ背の高い、塔のような建物が、遥か向こうまで無数に立ち並ぶ。
自分が今立っているところも…
そしてロナ宛の通達の内容。

『失い不死となれ　望まぬのなら外に出よ』

今まで感じた何より勝る恐怖にアリドラは叫んだ。
実際は空気が少し喉から吐き出されただけ。

少女権利　END

最終話（後書き）

２０１０／１１／２５
続編になる小説を開始しました。
▼続編【少女反逆】はこちら　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１３４７ｐ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5330o/

少女権利

2011年1月8日04時12分発行